

# 關係學研究

第1卷第1号

1972(昭和47)年度 pp21-32

原著

交差保育論

大戸美也子

日本關係学会

# 交 差 保 育 論

The Theoretical Study on the Cross-Educational Method

大 戸 美 也 子

(郡山女子大学短期大学部)

## 問 題

幼児教育実践上の重要な課題は、幼児の人格形成である。幼児の人格は、それ自体相対的独立の世界をもちながら、活動を媒介として他と共有領域をもち、その活動にかかわるかかわり方に規定されて構造化する。幼児との関係にあるものの幼児との関係の仕方は、活動状況を変化させ、幼児における活動状況へのかかわり方にきわめて大きな影響を与える。従って、幼児との関係にあるものは、幼児との関係をどのようになうとき、どのような変化が活動状況にもたらされて、幼児の人格が構造化されるかを洞察して実践する必要がある。 (①)

交差保育法 (Cross Educational Method) とは、幼児との関係にあるものが、「今、ここ」に展開する活動状況の何が、幼児に印象づけられ、何が役立つものとなって人格の構造化がすすむかを意図的にとらえて、幼児の教育環境 (②, ③) を調整していく保育理論・実践・技法である。交差保育法 (Cross Educational Method) をすすめていくためには、「今、ここ」に成立している自己・人・物との関係状況を「新しく」発展させるとき、幼児に機能する関係枠やかかわり方を意識的にとらえて具体的な活動を設定し、運営していかなければならない。 (④)

本論は、「一日入園」「バスごっこ」「交換保育」の3つの保育実践を素材に、「個人と集団課題」「小集団と小集団」「集団と集団」の交差状況がどのように展開して幼児の人格形成がすすむかを主として交差保育法の運営に焦点をあて明らかにすることをねらいとしている。 (⑤)

## 交差保育法の実践

### 1. 一日入園 一個人と集団課題の交差一

幼児は、これまで家族集団の中でその生理的発達によって規定されて自己や物に内接し、親の保護によって生存することで人に内接する状況が用意されてきた。子どもは、幼稚園の入園によってその生活圏を拡大し、そこで生起する新たな活動を媒介に、自己、人、物へのかかわりを拡大させ、さらに諸関係の展開過程に発展的にかかわることで、状況発展の多様なかかわり方を身につけていくことができる。一日入園は、幼児における自己、人、物との新しい関係の成立を媒介に<関係発展の基盤を作る>最初の活動として意味がある。幼児教育者は、個人の内的要求と集団課題とを発展的に交差できる状況を、その第一日目から用意して、個人が集団課題に当面する状況で接在的にふるまえる教育環境を整えることは極めて重要である。

集団課題が、活動始動から課題交差、課題交差促進へと変化する過程で、どのような状況が成立し、そこに教師がどのようにかかわって、幼児におけるかかわり方にどのような変化をもたらされたか、Fig. 1の段階をとって見ていく。

(第1段階) 活動始動の段階では、新しい集団状況で幼児における自己・人・物関係の成立しやすいように、教師は、幼児に内接的にかかわり、母子分化を促進する活動（電車ごっこ）を用意し、接在的に活動の発展にかかわる傾向がある。これによって、幼児は他者との外接的かかわり方から内接化の方向に人とのかかわり方を変化させていく。また、物との関係では外接に重点がおかれ、人との関係において多様なかかわり方を成立させるのがこの段階の特色である。

(第2段階) 課題交差の段階では、幼児が集団課題に内接して分化のおこなわれるよう、教師は「今、ここ」に展開する活動と先の活動とを接在的にとらえてふるもう傾向がある。これによって、幼児は人に外接しながら課題に外接から内接的にかかわるようになって、活動への自己内接状況が展開する。

子どもにとって集団課題は、役割取得、役割演技、役割付与の過程をたどって、交差状況の発展に自己が位置づきながら、幼児に即していえば状況へ内接しついで接在の方向に交差できている。

(第3段階) 交差関係促進の段階では、幼児が集団課題に内接できるよう、教師は動き、場面操作、物媒介の集団凝集によって集団課題を鮮明にし、課題の中に子どもをつつみこむ傾向がある。それによって、子どもは状況につつみこまれて課題に内接するが、役割分化が個別的に促進される場面では、課題に外接する子どもが出現する。ここに教師のかかわる重要な部分があろう。

#### (まとめ)

個人と集団課題の交差状況では、子どもが集団課題に内接する状況作りが目ざされる。教師はこのような状況を子どもの自己決定に内接したり、集団課題を物媒介、動き媒介によって課題・物（または動き）・子どもの3者関係を成立させることで課題への内接化を誘っている。以上のような教師の配慮がある、子どもは新しい他者との内接的関係、物との外接的関係、活動への接在的関係を成立させる、

交差関係の成立状況において、交差成立基盤に機能した教師の役割を特に「**技法**」と名づけ具体的に事例を示しながらその有効性を物媒介集団次に方向性提示の技法示す。

#### 技法 1.

ねらい：子どもの自己決定が許されている中で自己の安定領域を見出し、そこでのあそびを開いていて、先に予定されている課題活動に向けて誘導するときに使われる。それぞれの自己安定領域に切符が配られ、劇を見に広場に集まる技法。

実践：カーペットを敷いてから汽車ごっこをしているリーダーの近くにいって、「汽車ごっこ疲れたからカーペットの駅へ行って休みましょうか」と言う。

汽車がカーペットの方へ走ってきて、すわって休む。「トンネルさんもいらっしゃい」とのL<sub>2</sub>の誘いに子どもたちがどとおしよせる。

カーペットの方は汽車ごっこをしていたに任せて、プランコとシーソーのコーナーに行き、「これからね、広場でおもしろいことがあるの、人形劇がはじまるんですって、これはその切符ですよ」と言いながら、一人一人に切符を配って歩く。

#### 技法 2. 物媒介集団方向性凝集の技法

ねらい：集団の対面する方向が決まっておらず、メンバーが一定方向を向いていない時、物に一たん視線を焦点化し、物と視線とを保ったまま集団の対面方向に全員でむいていくとき使われる。風船を媒介に集団の視線を統一し指導者の方向に凝集させる技法。

実践：子供達全員がイス、カーペットに腰をおろす。はじめに人形をどんな形で子供達の前に

登場させようかと考え、黄色い風船に視線が集ることに気づいて、「みんなこの風船を見てね、一、二の三でこの風船の後からお人形がとび出しますよ」と言って、 $L_1$ とウサギを持つ $L_2$ とが重なり、「一、二の三」のかけ声でウサギがとび出す（風船がかくれる動作をすると、子供達が意外と喜んだのと、他の人形の用意ができなかったこともあってそれを待つ間4～5回くり返して行なう。）

## 2. バスごっこ 一小集団間交差一

幼児との関係にあるおとの関係の発展の仕方が、関係状況を変化させ、幼児における関係へのかかわり方に影響すると同様に、幼児との関係にある＜仲間＞との関係の発展の仕方も幼児の人格の構造化に影響を与える。

教師や仲間との接在的のかかわり方を媒介に、仲間との多様な活動の中で活動状況を発展させるあり方もその多面的な活動内容を豊富にしていくこともできる。クラス内の下位集団が相互にどのように交差すると、交差してできる共通活動領域を新たなかかわり方の生む基盤として、相方の発展に位置づくものとなるか。ここでは、A集団（バスあそびグループ）がB、C、D、E集団と交差する過程をとて、それぞれの交差状況の性格とそこでの教師、子どものかかわり方をFig.に即して見ていく。

（第1段階）個々のグループ活動がすすみ互いに外接、外在している段階では、各下位集団が独自に活動を展開するように、また、特定下位集団に多ぜいの子どもの参加があるように、教師は子どもに内接する教師と集団の方向性に接在する教師と役割を分担してかかわっている。それによって、特定下位集団活動は充実し、他の下位集団もこの集団に外接するようになる。

（第2段階）A集団とB集団とが＜役割付与・取得＞の関係をもって交差する段階では、教師はA集団にとどまって接在的役割、内接的役割をとりつけたため交差状況での接在的役割が発展的にA集団に位置づくことができた。一方、B集団は交差状況の中にいてとられた接在的役割がその後消えていった。（この関係は第5段階と共通である）

（第3段階）A集団とC集団とが＜役割取得・付与＞の関係をもって交差する段階では、A・C集団に教師が位置づいて、C集団における役割取得行為をA集団に、A集団における役割付与行為をC集団に介在させることで、両者の共通活動領域は双方にとって、次の活動の発展の契機を作っていた。

（第4段階）A集団にC・D集団が＜役割取得・付与＞の関係をもって交差する段階では、教師はA・C・D集団の交差状況を発展させる役割を操作し、子どもは役割を創技して相方に接在的役割関係を成立させた。

### （まとめ）

小集団間の交差状況では、相互の小集団が役割を媒介に接在的のかかわりの実現できる状況作りが目ざされる。教師は、このような状況を他集団との融合集団（交差領域）に位置づいて、子どもにおける接在的役割に内接することによって、役割操作、創技などで状況発展の役割を創案することにおいて実現している。以上のような教師の配慮があって、活動内容を充実させながら他集団と接在的にかかわる活動内容を豊富にし、また物の接在的のかかわり方を成立させたいといえる。

交差過程の発展および危機状況において交差発展および問題解決の基盤を形成するのに有効であった教師の役割を3つ（技法3—5）示す。

### 技 法 3. 役割取得・付与による交差状況発展の技法。

ねらい：一定の下位集団に他集団がかかわるとき，一定の下位集団の活動に接在する役割をとりながら参加，その役割を媒介に新たな役割付与・取得関係が成立し活動を発展させるとき使われる。

事例：B先生「淨土松って，どんな所かな」（園庭にバスの絵をかき，バスごっこをしている）

忠秀「あそこに見えますよ」と前のジャングルジムの方を指さす。

B先生「あそこが淨土松よ，皆で行ってみましょう」

又，並んでバスから降りる。

忠秀「ここが淨土松です」とすべり台の所を指さす。

B先生「ああ，いい空気だ」と深呼吸をする。

忠秀「下は川ですよ」と，説明する。

B先生「じゃあ，泳いでいきましょう」

忠秀「ここは，がけです」と説明する。

皆で泳ぐまねをして行く。すると，前の方に待ちうけていた4人の男の子が，大きな口を開けて「かばだぞー」という。B先生と子ども達は，その表情を見て笑う。かばになった4人の子は，すぐ先まわりをして，ジャングルジムにのぼって待っている，B先生と子供達がジャングルジムの方へ行く，そしてジャングルジムでぶら下ったりしている人を見て

B先生「あら，今度はおさるさんがいるわ」という。

4人の子どもは，キャッキャッと叫び声をあげたり，手でジャングルジムを，ひっかいたりしてさるのまねをする。

それを見ている子が（観光客）バナナの皮をむいてあげたり，らっきょうを，あげたりする。

### 技 法 4. 交差成果明記の技法

ねらい：一定の下位集団が他集団に出会い，再び自集団に戻ったとき，自集団も帰る毎に質的に変化する事実を明記するのに使われる。

事例：バスに戻るとき，入口でB先生「また，階段ふえちゃった」といって，棒で階段を2段かき加える。子どもは，線に注意しながら階段のところを通ってバスにのる。

### 技 法 5. 役割操作，創技による交差危機状況打解の技法

ねらい：一定下位集団が他集団と出合ったとき，破壊的役割（怪獣など）をとて参加する場合その役割のうちの発展的役割の側面を見出し，その役割を付与することで相方の活動のくずれを防ぎ発展的にするとき使われる。

事例：正面の坂をのぼりバスの方へ戻ろうとするバスの乗客に

「ウォーウォー」と4人が，四つんばいになって追いかけてくる，

B先生「恐竜がいるから気をつけなさい」

子供たちは，坂をあがって逃げる。4人の恐竜に，まわりにいた数人の子が新に加わって怪獣になつて吠えながら追いかけてくる。

A先生「ほらほら，後ろあぶないよ」

逃げる子ども達が坂道をあがりきって砂場の所にかたまっている。

怪獣「お腹がすいたから，食べちゃうぞ」

B先生「怪獣は何が好きなの？」

怪獣は少し考えているが「きゅうり」と答える。

B先生が「はいきゅうり」とあげる,  
怪獣は、それを食べて、おとなしくなる、それを見たA先生が,  
A先生「きゅうりくれると、おとなしくなるんだって」と言う  
子ども「おとなしくなれ！」と言って、きゅうりをあげて怪獣の頭をなでる。  
A先生「あら、恐竜、眠っちゃった」恐竜は「アウ」と言いながら寝そべる。

### 3. 交換保育 一集団交差一

2つの幼稚園が、相互に連絡をとりあって作品や活動を共有し、共有した活動を媒介として、それぞれが新たな作品や活動を生み出しその過程で自己や人や物の関係を新しく拡げ発展させていくことができる。教師の接在的かかわり方、物の有効な生かし方、あるいは用意の仕方で、個人および集団はこれまでの経験に規定しつくされないでふるまえる領域を見出し、相互の行為の中に自己、人、物への新しいかかわり方を実現していくことができる。ここでは、ZとTいう2つの幼稚園が相互に交差しあって集団交差を実現する過程をとて、それぞれ交差による共通活動領域の中で、教師・子どものかかわり方がどのようにであったかをFig-3を通してみていく。

(第1段階) 先生の手紙が契機となって、両園に手紙製作活動がはじまり、手紙の交換を通して交差対象を意識していく段階では、教師の3つの役割が有効であることがわかる。第1は、二集団相互に継続的、発展的に連絡しあえる物の選択のあったこと、第2に、外から投げこまれた手紙を子供の内的活動として発展しやすい状況で紹介できたこと。そして第3に、子どもが相手の手紙に刺激されて、自分の物へ新しくかかれる領域を見出し、その中で子どもの独自性が發揮されることを見通しての物の用意、受容性のあったこと。教師の物を接在的に生かす方があつて、子どもは、物、人、自己への接在的かかわり方を成立させ集団間が外接から内接していく。

(第2段階) それぞれの幼稚園がひとつのまとまりをもつ活動を展開させながら、集団として交差活動へ臨む体制のできる段階では、教師は各集団内で接在的・内接的かかわり方を見せる。Z集団では、物を媒介に集団メンバーが内接する状況、T集団では、物の生産を媒介に集団内メンバーの凝集し接在する状況が展開する。これによって、子どもは集団に内接しながら人との接在的、内接的かかわり方、物への接在的かかわり方を成立させる。

(第3段階) 二つの集団が合って、大きな集団を構成し、領域交差活動を展開、発展させる段階では、教師の2つの役割が有効に機能している。集団メンバーの活動へのかかわり方に変化がもたらされるように、その内容によって集団を分化、統合する、集団状況へ接在的にかかわるあり方、教師集団の集団発展の機能的役割のとり方を成立させている。これによって、子どもは相互に外接的かかわり方から内接的かかわりへ変化させ、人とのかかわり方も多面的・可逆的にすることができたといえる。

#### (まとめ)

集団間の交差のときは、交差対象を意識化させるために、物へ接在的にかかわって接在的に物を生かしする状況作りがねらわれる。物への発展的なかかわり方を媒介に自己や人へのかかわり方を新しくし、また具体的な2集団合同の活動において人関係を接在的にになうことができた。

#### 交差保育法実践の考察

交差保育法の中心的課題は、「今、ここ」に展開する何が幼児に印象づけられ、役立つものとなつて人格の構造化をすすめるのか、ということである。ここでは、それぞれの交差関係成立の

契機となった下位の交差状況に注目してこの問題を考察してみる。

事例1では、4つの課題(Fig.1の構造図参照)との交差関係の成立に、その前段階の「活動」への交差状況が極めて重要な役割を果しているといえる。教師との内接的関係を基盤に「活動」に内接的または接在的にかかわる子どもが機能的に統合される活動(Fig.1の③参照)を媒介に子どもは自己の活動領域外の活動に関心がむけられ、次の課題との出会いに期待をよせることができたと考えられるからである。

事例2では、小集団間の交差関係の継続的成立過程に、子どもにおける役割創出、および子どもの関係を内接的にになっている教師の場面演出が、極めて重要な役割を果している。自集団に内接している子どもが＜役割＞を媒介に他集団との関係を発展させ、それによって次の他集団との出会いにおける危機を発展的に解消させ小集団関係を持続させたと思われる。

また事例3ではFig.3の①・②の交差状況が、2集団の交差活動の発展に大きな影響を与えており。この段階で、物(手紙・作品)や活動への接在的かかわりを媒介に2集団の内接的交差状況が成立し、それによって未知の他集団との交差活動においても内接的または接在的交差関係を成立したと思われる。

以上3つの事例に共通なのは、教師が児童に内接的にかかわり(特に事例1、2で顕著である。)人関係における内接的関係を基盤として、児童の人や物への接在的関係に接在的にかかわっているということである。このことから、児童におけるよりよい人格形成を導く道が洞察されよう。

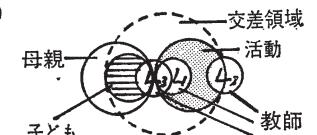
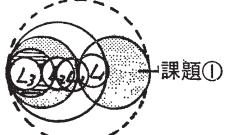
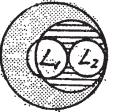
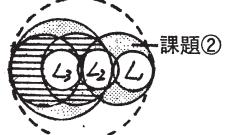
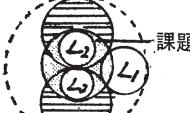
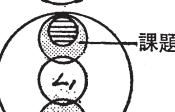
#### 交差保育法の課題

保育界が新しくとり組むべき教育(保育)課題として、松村康平氏によって提唱された交差保育法は、児童の人格形成の教育(保育方法)として開発され展開されていかなければならない。＜今、ここ＞に成立している自己や人や物との多面的関係を＜新しく＞展開させる多様なかかわり方を、実践を通して明らかにしていくことが大切である。そしてそれらの実践過程に内在する＜接在的交差関係状況の条件＞を多数見出して、児童における人格構造化の過程を促進するプログラムを作成していくことが残された課題といえる。

#### ＜文献＞

- ① 松村康平「児童教育実践の諸問題」(「児童の教育」第66巻11号 フレーベル館)
- ② 松村康平「児童と環境」(児童教育学全集第1巻 小学館 1970)
- ③ 松村康平「交差保育法」(日本保育学会報 1968年5月)
- ④ かかわり方については次の文献を総合して引用している。  
松村康平「子どものおもちゃと遊びの指導」(保育学講座第7巻 フレーベル館 1970)  
同著者「児童学辞典」(学生館 1971)  
同著者「World Congress of Psycho-Drama and Socio-Drama」(ソシオ・サイコ 1972)  
同著者「教育心理学における方法論としての弁証法」(日本教育心理学会第14回総会シンポジウム資料 1972)
- ⑤ 実践例は次の文献、資料に詳細に記録が載っているので参照されたい。  
大戸美也子、宮沢キヨ子、佐藤佳代子、大塚朝子、相楽幸子「交差保育法の実践」1~6、(「児童の教育」第71巻4号~7号、9号、12号、フレーベル館 1972)  
佐藤佳代子、吉田節子、渡辺由美子「バスごっこ」第 回日本心理劇研修会 研究発表資料)  
⑥ 松村康平編「児童臨床学」(お茶の水女子大学児童臨床研究室 1968)

Fig1. 1 個人・課題活動間交差活動（一日入園）の実践経過

交 差 動 機		交 差	
交差単位	交差関係の方向性	交差関係状況の特徴	交差関係構造図
自己・活動の交差	自己安定領域とあそび活動とを交差させ、あそびに内接または接在的にかかわって集団に内接する	<p>①二者外接的関係状況</p> <p>②外接的関係・内接的関係の並存状況</p> <p>③内接的関係・接在的関係の機能的統合状況</p>	  
活動・課題の交差	今、この個別的あそび活動と新しい活動（課題①）とを交差させ、物（人形）を媒介に課題活動に内接する	<p>④二者外接的関係状況</p> <p>⑤外接的関係・内接的関係の分極状況</p> <p>⑥二者内接的関係状況</p>	  
課題活動間の交差	今、この集団課題活動と新しい課題活動（課題②③④）とを交差させ、動き、物を媒介に課題活動に内接する。	<p>⑦外接的関係・内接的関係の分極状況</p> <p>⑧内接的関係の分化並存状況</p> <p>⑨内接的関係の分離並存状況</p>	  

過 程		
交 差 関 係	発 展 条 件	技 法
教師の役割 (チーム・ワーク)	活 動 内 容	
①母子分化の介在的役割をとる (L <sub>3</sub> ) 母子分化のできた子どもを活動に誘う (L <sub>1</sub> ) 子どもの参加しやすい活動の展開 (L <sub>2</sub> )	①電車が園庭を動き、子どもの好きな場所、遊具の所でとまる。	
②子どもと一諸にあそびを探す (L <sub>2</sub> ) 子どもと一諸にあそぶ (L <sub>2</sub> ) 活動に外接しながら全体を見て歩き 子どもやリーダーの要求に即して援助 (L <sub>1</sub> )		
③子どものあそびの変化をとらえて伸す (L <sub>2</sub> ) 子どものあそびの変化を自分たちの活動に生かして使う (L <sub>2</sub> )	③電車がくずれた時：それをトンネルに見たてて電車あそびに変化をもたらす。母、子でトンネルを作る。	
④課題活動の場面設定 (L <sub>1</sub> ) 今、こここの活動と新しい活動とを連結する活動を用意する (L <sub>1</sub> ) 連結活動を促進する (L <sub>2</sub> ) 今、こここの活動に内接している子どもに即して動く (L <sub>2</sub> )	④劇場を設定し、各コーナーにキップを配って歩く。	技 法 1
⑤活動の方向性を出して課題活動を促す (L <sub>1</sub> ) 活動の方向性に即してその内容を具体的に示す (L <sub>2</sub> ) 子どもの状況をとらえて活動の方向性を子どもに即したものにしていく (L <sub>3</sub> )	⑤風船を媒介に、各コーナーから集ってきた子ども集団を凝集させる。 人形を媒介に、クラス担任・保育室等が伝達される。	技 法 2
⑥子どもの状況、全体の状況を統合的にとらえて役割を演ずる (L <sub>2</sub> ) L <sub>2</sub> の動きをとらえて全体に明確に伝達 (L <sub>1</sub> )	⑥子どもの知っている歌を、歌の好きな人形（うさぎ）と一諸にうたう。	
⑦新しい課題活動の提示 (L <sub>1</sub> L <sub>2</sub> ) 新しい課題に応ずる子どもに即して動いて課題内容を明らかにする (L <sub>2</sub> ) 課題内容を具体的に子どもに伝達する (L <sub>3</sub> )	⑦クラスの担任教師を柱にアクション・ソシオメトリーによりグルーピングする。	
⑧クラス集団を凝集させる活動を進める (L <sub>2</sub> ) L <sub>2</sub> の方向性に即して凝集活動を促す (L <sub>3</sub> ) クラス集団活動、母親集団活動をとらえて両者の活動の調整をはかる (L <sub>1</sub> )	⑧園庭の両端に小舞台を対応させて置き、自集団活動が相互に鏡反射的にとらえられてクラス別活動を展開する。	
⑨集団課題を順次、提示する (L <sub>3</sub> ) 課題内容を確かめて子どもに伝達する (L <sub>3</sub> ) 課題活動の展開し易いように物を整える (L <sub>1</sub> )	⑧～⑨折りから吹いてきた風に乗って木の葉になって園庭から保育室へ移動する。	

Fig. 2 小集団間交差活動（バスごっこ）の実践経過

交 差 動 機		交 差	
交差単位	交差関係の方向性	交差関係状況の特徴	交差関係構造図
小 集 団 関 係 の 交 差	五つの下位集団が 交差し、接在的活 動を展開する。	①コーナ内、内接的関係・接 在的関係の機能的統合状況	① 
		②コーナー間（A・Bコーナー）外接的関係状況	② 
		③コーナー間（A・Cコーナー）内接的関係・接在的関係の機能的統合状況	③ 
		④コーナー間（A・C・Dコーナー）内接的関係・接在的関係・外接的関係の共存状況	④ 
		⑤コーナー間（A・Eコーナー）外接的関係状況	⑤ 

昭和47年10月27日 郡山市富田幼稚園にて実施

過 程		
交 差 関 係	発 表 条 件	技 法
教師・子どもの役割 (チーム・ワーク)	活 動 内 容	
①活動の方向性を示す (T男) 活動の方向性を確認し、他の子どもに具体的に伝達する (L <sub>1</sub> ) 出された方向性に即して動く (L <sub>2</sub> )	①園庭にバスの絵を描き、タイヤを並べて車に見立て、また落ち葉を切符に見立ててバスに乗ったり降りたりする	
②活動の方向性を出す (L <sub>1</sub> ) 他のコーナー連結の介在的役割をとる (T男: Bローナ) 他コーナーと連結して得た物を自集団活動に生かして使う (L <sub>1</sub> ・L <sub>2</sub> ) 自集団の変化を明記する (L <sub>1</sub> )	②バスの乗客の希望をきいて、飲物を買いにAコーナー (プランコ) へ行く飲物をのんだ後、(想像の) 空ビンを皆でガラス捨て場へ捨てに行く。 他集団と出会って、再びバスに戻る毎に、バスの階段を一段づつ増やしていく。	技 法 4
③活動の方向性を出す (L <sub>1</sub> ) 活動の方向性を場面化する (T男) 場面に即して役割を取得または付与してふるまう (A・Cコーナー) 子どもの役割取得行為を目立たせる (L <sub>1</sub> ) 子どもの役割取得行為に対応させて新しく役割を創造させる (L <sub>2</sub> )	③バスに乗って公園に行き、川や動物園の場面を設定していく。Cコーナーの子どもが動物になり、バスの乗客がエサを与えて動物園ごっこになる。	技 法 3
④場面の転換を明らかにする (L <sub>1</sub> ) 役割を創造して危機的場面をのがれる (L <sub>2</sub> ) 危機的場面を乗り越える役割を子どもに伝える (L <sub>1</sub> )	④動物園ごっこを見ていたDコーナーの子どもが怪獣になって参加、怪獣の好きな物を与えて怪獣を眠らせバスに戻る。	技 法 5
⑤場面を設定する (T男) 場面に即応した役割取得行為を指示する (L <sub>1</sub> ) 指示された役割を実現する (L <sub>2</sub> )	⑤バスが火事になって、Eコーナー (砂場) に助けを求めに行き、砂で火を消す。	

Fig. 3 集団交差活動（交換保育）の実践経過

交 差 動 機		交 差	
交差単位	交差関係の方向性	交差関係状況の特徴	交差関係構造図
集 団 間 の 交 差	物媒介に2集団が 交差し、物へ接在 的にかかわって2 集団が内接的にか かわる。	<p>①物関係双方外接、集団間外 在的関係状況</p> <p>②物関係一方接在、集団間外 接的関係状況</p> <p>③物関係双方接在、集団間内 接的関係状況</p>	<p>①</p> <p>②</p> <p>③</p>
	自集団と課題活動 とを交差させ2集 団は外接しながら 課題活動に内接	④集団内内接的関係、接在的 関係の共存状況	<p>④</p>
	2集団が交差し、 合同活動に接在的 にかかわる。	<p>⑤集団間内接的関係状況</p> <p>⑥内接的関係、接在的関係の 分化状況</p> <p>⑦内接的関係、接在的関係の 機能的統合状況</p>	<p>⑤</p> <p>⑦</p>

過 程		技 法
交 差 関 係	発 展 条 件	
教師の役割（チーム・ワーク）	活 動 内 容	
<p>①交差の時期・方法を事前に2集団の教師間で打ち合せる。 子どもに受け入れやすい時期を待って、手紙を投入し披露する（Z幼）</p> <p>②子どもに受け入れやすい活動の中で手紙を投入し、手紙の内容の理解しやすい場所に移動して手紙を読む（T幼） 披露された手紙を契機に、手紙の製作が展開しやすい状況の設定をする</p> <p>③相手の手紙に子どもと共に共感する相手の手紙に刺激されて、新しい物の生かし方の実現できる状況（受容性・物の用意）を用意する。 T幼稚園内の他集団（クラス）とZ幼稚園とが知り合う介在的働きをする（T幼稚園タンボボ組） 新しい集団を子どもに知らせ、連絡をとり合う活動を用意する。 クラス全体が連絡物製作過程に参加できるような仕事を分担し、役割を付与する（T幼稚園・レンゲ組）</p> <p>④他集団との交差状況で生かされる活動に参加して、自集団を凝集させる</p> <p>⑤2集団連結の介在的働き（L<sub>1</sub>） 自集団の紹介を通して、連結を促す（L<sub>2</sub>）</p> <p>⑥交差活動の方向性を出す（L<sub>1</sub>） 活動の方向性の実現しやすいように小集団に分化して活動場面を案内、説明（T） 説明された物に実際触れながら理解（Z） 次の活動に向けて物の準備をする（L<sub>1</sub>）</p> <p>⑦新しい活動場面に誘導する（T幼のL<sub>2</sub>） 誘導された場所で新しい物を発見（子ども） 子どもの発見に共感する（L<sub>2</sub>）</p>	<p>①T幼稚園の先生がT幼稚園の様子を具体的に記した手紙をZ幼稚園の先生へ出す。</p> <p>②月曜日の朝の生活発表の時T教師自身の生活発表として届いた手紙の話をし、林に行って手紙をよむ。</p> <p>③T幼稚園のタンボボ組が媒介となって、手紙や製作品を通して新しい集団を双方に知らせる。 レンゲ組全員で、模造紙大の地図を作ってZ幼稚園に送る。</p> <p>④Z幼稚園ではプレゼント用のカードを作り、T幼稚園では誕生会の時全園児で明日の活動を確認し、ダンスをする。 交差活動の当日、T幼稚園では待つ間、プレゼント製作のため全園児が役割を分担して参加する。</p> <p>⑤2集団が横円状に並んで対面し、相方の集団の特色がわかるよう、手紙の内容や今日の活動にふれながら子どもの紹介をする。</p> <p>⑥T幼稚園の年長児2クラスが核になって、Z幼稚園の子どもを二分し、園庭を見物する。</p> <p>⑦裏山の林に行ってドングリや松ぼっくりを拾い、一諸にお弁当を食べてあそぶ。</p>	